



林地崩壊(厚真町)。写真提供=北海道・平成30年9月7日撮影



第12号

2023 秋号

厚真町長に聞く

北海道胆振東部地震から5年 生産空間を取り戻す インフラ復旧の軌跡

厚真町長の宮坂尚市朗さんは、こう振り返る。「明治以来最大規模の土砂災害でした。約9,000年の間、安定していいた樽前山や支笏カルデラの噴出物が崩れたのです。尊い命が犠牲になりました。これまで積み上げてきた生産空間も失われてしまいました。人間は何でもできるのではないのだと思い知らされ、自然を、地球を学ぶ大切さを痛感しました」。

山の斜面の崩落は約4,300haに及び、その75%を厚真町が占める。とりわけ対策に急を要したのは、崩れた山の土砂で日高幌内川が1,100mにわたって堰き止められ、上流部に水が溜まつて天然ダム湖ができてしまつたこと。「万一本が崩れて天然ダム湖になだれ込んだら、大量の水と土砂に下流の市街地が襲われます。なんとかしなければ。でも、こんな大規模な

厚真町長の宮坂尚市朗さんは、こう振り返る。「明治以来最大規模の土砂災害でした。約9,000年の間、安定していいた樽前山や支笏カルデラの噴出物が崩れたのです。尊い命が犠牲になりました。これまで積み上げてきた生産空間も失われてしまいました。人間は何でもできるのではないのだと思い知らされ、自然を、地球を学ぶ大切さを痛感しました」。

川も農地も土砂に埋もれる

平成30(2018)年9月6日に発生した「北海道胆振東部地震」。44人の尊い命が失われ、785人が負傷した。北海道で初めて最大震度7を記録した厚真町では、建物をはじめ、農地、ダム、用水路など農業生産のためのインフラも大きな被害を受けた。生産空間を取り戻すにはどんな苦労があったのだろう。厚真町長の宮坂尚市朗さんに復旧の軌跡をうかがい、未来につなぐ防災教育についても取材した。



被災者として災害を語り継ぐことの使命と考える厚真町長の宮坂さん。

河道閉塞の経験などありませんでした。国が主導した技術検討会で学識経験者から意見を聞き、ヘリと地上から確認し、天然ダム湖まで運搬路を造成しました。電源も電波も届かないところですから、ソーラー発電と衛星電波で監視カメラや水位計を作動させて監視を続けながらの作業です。そしていつ崩れても最小の被害ですむよう、

堰堤(砂防ダム)を造つてから、河道を成形していくのです」。道なき道での資機材の運搬には、車輪ではなくキャタピラーで走行する特装車が使われた。24時間体制の作業で、10日で土砂撤去を終えた。この他にも道道、町道の道路啓開や応急復旧にも地元の建設会社が総力で取り組んだ。



町長室には被災木を活用したコロナ感染防止の立てが置かれていた。



2023年9月に上厚真小学校で行われた防災学習。北海道胆振東部地震の被害状況や復旧対策等について、厚真町の担当者が6年生に語った。

命を守る学び

厚真町の上厚真小学校では、学年ごとにユニークな学びが行われている。校長の清水京子さんはこう語る。「大きな災害を経験した地域の学校における防災教育ですから、全ての児童が自分事として課題を捉え、課題解決に向かう内容であることが大切だと考えています。各学年の学習活動では、自分たちの身の回りや地域の実態等を調べ、必要なことを考える学習となつており、児童ができるうこと』を考える活動となつています」。

低学年は日本気象協会北海道支社が開発した防災utherlandを使って学び、3年生になると、定池さんから「防災マップ」の意義を聞いて、実際に、自治会の大

陸でなくなり、水を張ると漏れる
被災があつた。

厚幌導水路の工事は、地震前に約95%が完成していた。ところが地震にひとたび被災すると復旧までに多大な時間とコストがかかることがわかる。北海道には、農林水産業の豊かで広大な生産空間がある。その恵みを享受し続けられるよう、知恵を出し合って解決していくものだ。

子どもたちにコトを伝えたい

上厚真小学校の子どもの発達に応じたカリキュラムは非常に勉強になりました。「自分で分りして」「自分の立場で」「自分にできそうなこと」という重要なキーワードをどの学校でも大事にしたいものです。気象変動などによる災害の激甚化も頻発する中で、命を守るために学びを紡ぎ続けることが学校の最大の役割なのだと思います。

防災教育の原点は、「知る」ことだと思います。北海道胆振東部地震では、「約9,000年にわたり安定していた樽前山や支岡カルデラの噴出物が崩れた」という宮坂町長のお話に本当に驚きました。「人間は小さい、地球は大きい」とつくづく思います。この事実から恐怖を超えた自然への畏敬の念を芽ぶことも防災教育の原点ではないでしょうか。

そして、人のすごさを子どもたちに希望として伝えたいと思います。大災害を超えてわたしたちは、慰めあい、支えあい、祈り、直し、前進しています。未来への希望までつなげる防災教育をぜひ考みたいものです。

まだまだ苦労が続く中で取材にお応えいただいたみなさん、本当にありがとうございました。

理事長：新保 元康
(元札幌市立小学校校長、専門は社会科)

ない。この複雑なやりとりで力を發揮したのが、各機関から派遣された「リエゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡し」の意味）の存在だったという。厚真町は東日本大震災後、町職員が「人と防災未来センター」の定池祐季さん（現・東北学院大学准教授）の研修を受けていた。同センターは阪神・淡路大震災を契機に設置されたもので、災害調査・研究、被災自治体の災害対応に関する研修等を行っている。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」の定池祐

季さん（現・東北学院大学准教授）の

研修を受けていた。同センターは阪

神・淡路大震災を契機に設置された

もので、災害調査・研究、被災自治体

の災害対応に関する研修等を行ってい

る。「地震翌日、1,100人以上が避

しない。この複雑なやりとりで力を發揮

したのが、各機関から派遣された「リエ

ゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡

し」の意味）の存在だったとい

う。厚真町は東日本大震災後、町職員

が「人と防災未来センター」

ほっかいどう学 前進中!

※以下、肩書きは開催当時のものです。

①第5回ほっかいどう学シンポジウム 開催報告

7月28日(金)に5回目となるシンポジウムが開催されました。今回は「教育と土木でつくる北海道の未来ー高校生、動く、考える!!」をテーマとして、高校の動きに着目。基調講演では、林正憲様(前北海道札幌北高等学校長)をお招きし、社会に開かれた学校教育の重要性を講演いただきました。続くパネルディスカッションでは、佐藤豊記様(北海道高等学校遠隔授業配信センター次長)、萩原一利様(帯広建設業協会・萩原建設工業(株)代表取締役社長)、近藤里史様(空知建設業協会・(株)砂子組専務取締役)にご登壇いただき、企業と学校との連携の先進的な取り組みについて話題提供いただきました。北海道の人材育成に向けて、それぞれの立場でできることを改めて考える場となりました。



第5回 ほっかいどう学シンポジウム

②令和5年度(2023年度)第5期通常総会 開催報告

シンポジウムと同日に令和5年度(第5期)通常総会を開催しました。正会員の皆様のご協力により、ほっかいどう学新聞の季刊誌化や、小学校向けのデジタル教材(副読本、スライド、動画クリップなど)の作成など、今期事業計画を含む全議案について原案とおりご承認いただきました。引き続き、会員の皆様の応援をいただきながら活動を推進してまいります。

③教員&開発行政&技術スタッフで「第1回全道みち学習交流会」を開催

7月29日(土)に(一社)北海道開発技術センター(通称dec)、当法人の主催により、「第1回全道みち学習交流会」が開催されました。道路をはじめとするインフラを小中学生に学んでもらう「みち学習」の活性化を目的として、全道10地域から学校教員、開発行政担当者、技術スタッフ40名が一堂に会し、情報共有、意見交換を行いました。出席者からは各地で開発されたみち学習の普及・一般化に向けて様々なアイデアが出されました。ほっかいどう学の推進に向けて、今後もこうした交流の場を増やしていきたいと考えています。



第1回 全道みち学習交流会 意見交換の様子



第1回 全道みち学習交流会 記念撮影

※以上のセミナー等の詳細は、ほっかいどう学HP(QRコード)からご覧ください。→

**会員募集中 一緒に「ほっかいどう学」を創りましょう!**

ほっかいどう学を応援してくださる皆さま、ぜひ、当法人へのご入会をご検討ください。会員の皆さんには、この「ほっかいどう学新聞」を郵送でお届けするとともに、各種情報(セミナーやインフラツアー開催案内等)をメールにて最速でお知らせします。ご入会の案内は右のQRコードよりご覧いただけます。

**ほっかいどう学新聞 第12号 2023年9月30日発行**

発行人／新保元康、編集人／北室かず子、編集スタッフ／原文宏 宮川愛由 森希美、デザイン／スタジオコロール
発行所／認定NPO法人 ほっかいどう学推進フォーラム TEL011-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 URL <https://hokkaidogaku.org> E-mail info@hokkaidogaku.org